



「いないもの調査」の視点を

古野 隆雄 有機農家 毎日新聞 12(H24). 8. 7

姿消した鳥や昆虫 身近な自然に異常

有機農業を始め、35年になる。毎日田

畑から自然を一定点観測してきた。この数年でスズメ、ヒバリ、ツバメ、メジロ、ヒヨドリなどの鳥類や、ミツバチ、チョウ、トンボ、アリなどの昆虫が激減している。元気なのはカラスだけ。いつか、人とカラスしかいないような状況になるのではと危機感を抱いている。環境教育として、各地の川や田んぼで「生き物調査」がされているが、「いないもの調査」の視点も必要ではないだろうか。

減少を特に感じたのは、昨秋から今春。モチノキに赤い実がなればヒヨドリが食べるのが普通だが、昨秋は食べる鳥がおらず、九州各地で赤い実が長い間たわわに枝についていた。梅が咲けばメジロが次々とやってきたものだが、今春はついにメジロも姿を見せなかった。

スズメも極端に少ない。子供のころ、朝寝坊すればスズメの鳴き声で起こされたし、夕日を浴びて竹林に集まるスズメの鳴き声はうるさいほどだった。米をどんどん食べるから、どの田んぼにもかかしがあった。今、スズメの鳴き声で目覚めることもないし、かかしも見なくなった。

田んぼからスズメが激減したのは5、6年前。代わりにムクドリが来た。2、3年前にはそれも姿を消し、今度はセキレイが来るようになった。どちらも田んぼで見たことなかった鳥だ。そのセキレイさえ昨年あたりから見かけない。

この春、ミツバチも本
当に少なかった。菜の花

ふるの・たかお 1950年、福岡県桂川町生まれ。九州大農卒。アイガモ水稲同時作りに取り組み、技術革新を進めて国内外に広めた。近著「アイガモがくれた奇跡」(家の光協会)。

やレンゲが咲いてもミツバチが来ない春は寂しい。以前はレンゲや菜の花の中を歩くと、顔に当たるほどミツバチがいたものだが。

ヒバリやツバメ、チョウやアリ、身近な生き物が減っている。こうした減少はここだけのものか。全国の友達に電話で尋ねた。「言われてみればそうだ」との答えだった。

これは個別の生き物の問題ではない。身近な自然全体の問題だ。かつて強い農薬が使われた時期もあったが、その時よりも今の方が生き物が少ない。トキやコウノトリばかりが衆目を集めるが、身近な自然も大切だと思う。

原因は何なのか。低毒と称し広範に使われているネオニコチノイド系の農薬、温暖化、放射能の影響など可能性はいろいろあると思うが、一つではないかもしれない。まずは多くの人に、身近な自然が貧しくなっていないか、自分の目で見てほしい。昔はどうだったか、年配の人に聞き、比較してほしい。

人を含め、自然はみんな命でつながっている。生き物が少なくなっているということは、人間の生きる力も弱くなっているのではないだろうか。身近な生き物の減少は、自然からの警鐘だ。

【構成・伊藤奈々恵】

福岡



福岡市
桂川町



スズメやミツバチの減少
スズメの個体数について、岩手医大の三上修講師(生態学)は、山階鳥類研究所が全国で実施している鳥類標識調査のデータを基に、90年ごろからの約20年間で少なくとも5、6割減少したと推定。またミツバチの大量死・大量失踪は世界各地で相次いでおり、日本でも09年春に21都県でミツバチが不足するなど問題になった。今春、イネのカメムシ防除などに使われるネオニコチノイド系農薬にさらされたミツバチが帰巣能力を失い、巣の外で死ぬ確率が高まるという研究結果が米科学誌サイエンスで報告された。

「地方・発」は毎週火曜日に掲載します